

# 長崎大学経済学部生の G-TELP スコアに見る 英語習熟度の伸長に関する考察

丸 山 真 純

## Abstract

This article examines the English progress of first-year students of Economics in Nagasaki University by comparing their G-TELP (Level 3) scores in the first and second semesters of 2011. The 264 students took the test twice - one in the first semester and the other in the second semester. The average total score in the second semester was significantly higher than that of the first semester. A more in-depth analysis revealed the following tendencies: (a) those who scored higher in the first semester tended to produce much lower scores in the second semester; (b) conversely, those who scored lower in the first semester tended to score much higher in all sections of the test in the second semester. This suggests that the classes were more effective for less-proficient students of English than for students with higher degrees of English proficiency. The declining scores of the more-proficient students in the second semester might be in part because the classes were not offered on a proficiency basis. In conclusion, the findings of this study would seem to suggest that serious measures need to be taken to improve the English proficiency of the students with higher scores and not just the low-level ones.

**Keywords:** G-TELP, English proficiency progress

## 1. はじめに

長崎大学では、2011年度入学生全員が、「総合英語」(1年次前期)および「総合英語」(1年次後期)の両科目の学期末に、G-TELP(レベル3)を受験した<sup>2</sup>。本稿は、この2回のG-TELPの得点を用いて、2011年度長崎大学経済学部入学生の英語習熟度の伸長を検証する。それにより、英語教育の効果や今後に向けての効果的な英語教育への示唆を得ることを目的としている。

長崎大学では、G-TELPは、英語クラス間の成績評価の平準化を図ること<sup>3</sup>と習熟度クラス編成に利用する<sup>4</sup>目的のため、当該科目(必修科目)の受講生全員が受験する。G-TELP(レベル3)は、概ね、TOEICスコア400~600点ほどの受験生を対象としており、長崎大学経済学部生の英語習熟度に見合ったテストであることが示されている(丸山, 2011)。G-TELPは、文法・リスニング・読解の3セクションをそれぞれ100点満点で評価し、この3セクションの得点の合計が総点(300点満点)となる<sup>5</sup>。

G-TELPとTOEICとの対応関係は、表1のようになっている。また、G-TELPとTOEICの換算式を求めた調査においては、ふたつのスコアの対応は次のようになった(丸山, forthcoming) :

- 
- 1 以後、特に断りがない場合、単に「G-TELP」と表記する。
  - 2 2011年度入学生は、1年次前期と後期の両学期にG-TELPを受けた最初の年次生である。
  - 3 当該科目の成績の20%をG-TELPの総点で評価する。
  - 4 ただし、本年次生は、カリキュラム編成の都合により、前期のG-TELP総点を後期の習熟度別編成には利用していない。したがって、後期に受講した「総合英語」は、習熟度別編成とはなっていない。
  - 5 G-TELPの詳細については、丸山(2011)および小笠原・西原(2011)などを参照のこと。また、公式ウェブサイト(<http://www.g-telp.jp>)を参照のこと。
  - 6 この換算式は、2011年度経済学部入学者を対象に、2011年7月実施のG-TELP(レベル3)と同年10月末に希望者を対象に実施したTOEICスコアから導き出されたものであり、受験者数も限られているため(163名)、おおよその対応関係として捉えられるべきものである。

$$\text{TOEIC スコア} = 2.102 * \text{G-TELP スコア} + 52.864 \quad R^2 = .517 \quad \dots\dots\dots(1)$$

表 1 G-TELP (レベル3, 300点満点) 得点と TOEIC 得点の対応表<sup>7</sup>

G-TELP 得点	100点以下	150点	200点	250点	300点
TOEIC 得点	400点未満	400点前後	450点前後	500点前後	600点以上

以下では、長崎大学経済学部2011年度入学生が1年次前後期にそれぞれ受験した G-TELP 得点について、(1) 総点の伸び、(2) 相関分析、(3) 文法得点の伸び、(4) リスニング得点の伸び、(5) 読解得点の伸びについて分析する。最後に、本調査結果から得られる今後の英語教育プログラムへの示唆を論じ、結論とする。

## 2 . G-TELP 総点の伸長

本節では、G-TELP 総点の伸びについて、(1) 受験者全体の伸び、そして、(2) 受験者10%分位ごとの得点の結果を分析する。

### 2.1 . 受験者全体の伸び

長崎大学全学教育の「総合英語」(前期)および「総合英語」(後期)の最後の授業において、受講生は G-TELP を受験した。本科目は必修科目のため、経済学部の1年生全員が受験した。前期においては、G-TELP のバージョン312、後期については、バージョン319を利用した。なお、2つのクラスでは、手続き上の不備により、他クラスと異なるバージョンの G-TELP を使用したため、今回の分析対象からは除外している。そのため、受験生の総数は265名である。また、1名については、後期は未受験のため、前後期ともに受験したのは264名となる。

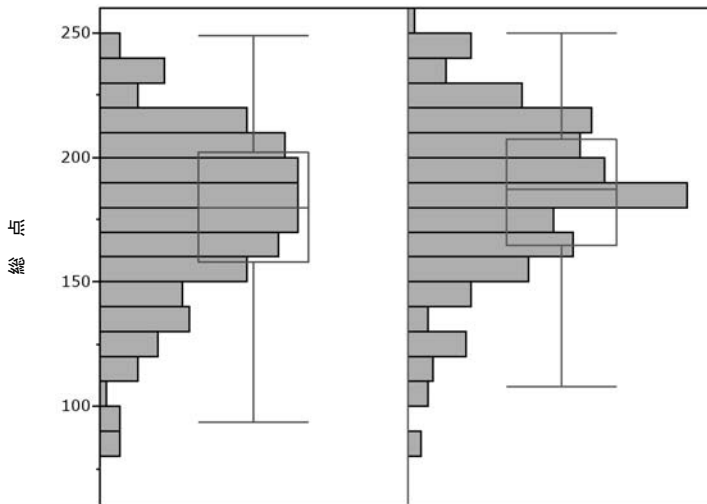
7 小笠原・西原(2011), p.3より。

表2はG-TELP総点の前後期の記述統計量である。また、図1は前後期の総点のヒストグラム・箱ひげ図である。前期の受験者総点の平均値は177.52 (SD=32.5) 点であった。これは、上記の表1の換算表では、TOEIC換算で、422点程度、また、上記の(1)式からは、TOEIC 426点程度となる。後期の総点の平均点は185.30 (SD=31.7) 点であった。これは、表1の換算表および上記(1)式から、それぞれ、TOEIC 435点、442点相当となる。

表2 G-TELP 総点前後期の記述統計量

	N	平均	標準偏差	最大値	中央値	最小値
前期	264	177.52	32.5	249	180	81
後期	265	185.30	31.7	250	187	82

図1 前期(左)・後期(右)の総点のヒストグラム・箱ひげ図



総点の平均的な伸び (i.e., 「(後期の得点) - (前期の得点)」の平均) は7.77点であった。対応のあるペアによる t 検定を行ったところ、 $p < .05$ で

あり、統計的に有意に G-TELP 総点に伸びが認められた ( $t=4.83$ )。なお、前期と後期の総点の相関は  $r=.67$ であった。平均点や中央値では、得点の伸長が見られるものの、最高点や最低点ではほとんど変化が見られない。つまり、平均的な底上げは見られるものの、最高点や最低点の上昇は見られなかった。また、図 1 が示すように、得点分布に大きな差は生じていない。

## 2.2. 10%分位別グループによる伸長

上述のように、全体としては、G-TELP 総点の伸びが統計的に認められたが、前後期の得点分布に大きな違いは見られない。したがって、受験者の得点層別の伸びをより詳細に調べる必要がある。この目的のために、前期の総点に基づいて、受験生を10%分位ごとにグループとして、上位10%の受験者から順に、1～10のグループとした(「総点分位グループ」)。前期総点の分位点は表 3 に示している。

表 3 分位点と総点分位グループ<sup>8</sup>

	上位 10%	20%	30%	40%	50% (中央値)	60%	70%	80%	90%	最小値
前期総点	215	206	197.5	189	180	172	163	151	134	81
総点分位グループ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

### 2.2.1. 前期の総点

図 2 は前後期総点の分位別ヒストグラム・箱ひげ図である。また、表 4 は、総点分位グループごとの得点の伸びを表したものである。前期の総点については、平均点では、グループ 1 とグループ 2、グループ 8 とグループ 9、そして、グループ 9 とグループ 10 のあいだにやや大きな差がある。また、最上

8 「グループ 1」は215点以上、「グループ 2」は206点以上215点未満、以下同様に、81点以上134点未満が「グループ10」となる。

位層，最下位層でやや得点にばらつきがあるものの，他の分位グループでは得点のばらつきが比較的小さいことが見てとれる（図2の各分位グループの左側参照）。

表4 総点分位グループごとの総点の伸び

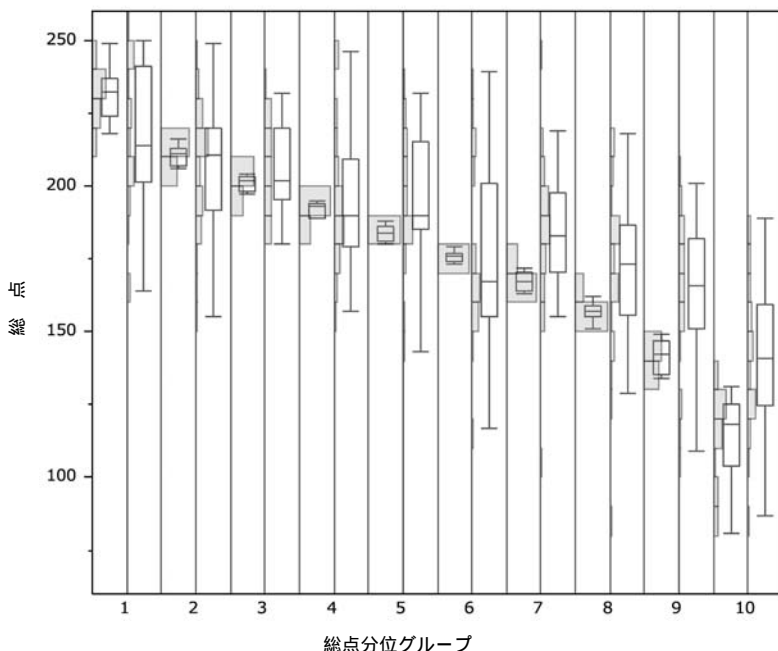
総点分位 グループ	前期 総点	後期 総点	差の平均	得点差			相関 <sup>9</sup>
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 22)	231.46 (8.9)	214.86 (24.2)	-16.6* (24.2)	20	-15	-67	.19
2 (n = 32)	210.38 (3.3)	205.84 (21.4)	-4.5 (21.3)	43	-1.5	-53	.11
3 (n = 26)	200.73 (2.3)	205.15 (15.6)	4.4 (15.2)	31	0	-21	.25
4 (n = 30)	192.03 (2.4)	195.43 (23.8)	3.4 (23.5)	52	-1.5	-36	.15
5 (n = 23)	183.39 (2.7)	194.70 (22.0)	11.3* (21.9)	46	9	-37	.11
6 (n = 23)	175.78 (1.8)	175.91 (29.9)	0.1 (29.7)	63	-11	-59	.15
7 (n = 30)	167.33 (3.2)	183.33 (24.2)	16.0* (24.5)	77	15	-59	-.02
8 (n = 29)	156.52 (3.3)	170.72 (28.3)	14.2* (28.3)	60	16	-73	.04
9 (n = 24)	141.17 (5.7)	162.42 (25.2)	21.3* (24.7)	55	22.5	-38	.19
10 (n = 25)	114.08 (15.2)	141.24 (24.8)	27.2* (20.3)	64	23	-4	.57

( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$

9 前期と後期の得点の相関係数。以後の表でも同様。

図2 前期（左）・後期（右）の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図

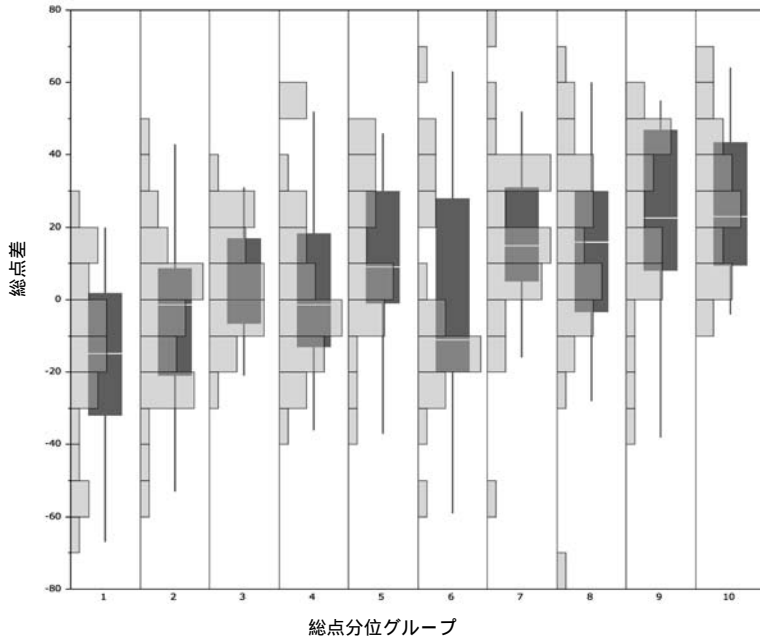


### 2.2.2. 前後期の比較

図2の各分位グループの右側は、各グループの後期総点のヒストグラム・箱ひげ図である。分位ごとの平均点の順番の入れ替わりは、ほぼない。つまり、前期での総点が高いほど、後期での総点が高い傾向がある（相関係数  $r = .67$ ）。しかし、上位層で、得点が下がる傾向、また、逆に、下位層の得点の上昇によって、平均点の範囲が狭くなっている。表4の平均点の差、および図3の分位別の得点差（「後期の総点」 - 「前期の総点」）を見ると、前期において得点の高い層ほど、後期の得点の低下が大きくなる傾向があり、逆に、前期の得点が低い層ほど、後期の得点の伸びが大きくなっていることがわかる。

さらには、分位グループ内の散らばり（標準偏差）が、後期において、ど

図3 総点差の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



のグループにおいても、かなり大きくなっており、グループ内の総点の伸びのばらつきが生じている。これは受験生によって、総点の伸びが一様ではないことを示している。どのグループにおいても、得点を大きく落とす受験生がいる一方で、最上位グループを除けば、得点を大きく伸ばす学生もいる。人数は限られるが、前期で下位のグループにいた受験生でも、後期には最上位レベルの得点に伸びている受験生もいる。

### 3. 相関分析

本節では、G-TELP 各セクション別の分析の前に、文法、リスニング、読解、総点の前後期それぞれの相関関係を簡単に確認する。



表 5 は前後期の総点・文法 (GRM)・リスニング (LST)・読解 (RDG) の相関行列である。すべてのペアの相関は  $p < .05$  であり, 統計的に有意であった。

表 5 総点・文法・リスニング・読解の相関行列

	前期の GRM	前期の LST	前期の RDG	前期の 総点	後期の GRM	後期の LST	後期の RDG	後期の 総点
前期のGRM	1	.14	.49	.80	.52	.34	.42	.55
前期のLST	.14	1	.28	.56	.15	.31	.24	.30
前期のRDG	.49	.28	1	.83	.45	.39	.53	.59
前期の総点	.80	.56	.83	1	.53	.47	.56	.67
後期のGRM	.52	.15	.45	.53	1	.29	.44	.75
後期のLST	.34	.31	.39	.47	.29	1	.47	.76
後期のRDG	.42	.24	.53	.56	.44	.47	1	.82
後期の総点	.55	.30	.59	.67	.75	.76	.82	1

### 3.1 . 文法セクションの相関関係

前後期とも, 文法に関しては, リスニングとの相関が弱く, 読解との相関がやや高い。前後期の文法の相関は  $r = .52$  であった。前後期総点と当該期の文法との相関に関しては, 前後期とも, かなり高い (前期は  $r = .80$ ; 後期は  $r = .75$ )。前期の文法と後期の総点との相関に関しては,  $r = .55$  であり, 中程度の相関が見られた。また, 後期の文法と前期の読解にも,  $r = .42$  の中程度の相関が見られた。

### 3.2 . リスニング・セクションの相関関係

リスニングに関しては, 前期は他の領域や総点との相関は弱い。前後期のリスニングの相関は  $r = .31$  であり, それほど高い相関とは言えない。

注目すべきは, 後期のリスニングと前後期の他領域との相関の値が相対的

に高くなっていることである。まず、後期のリスニングと文法と読解との相関が、前期のリスニングと文法と読解との相関よりも高くなっている(前期：それぞれ  $r = .14$  と  $r = .28$ ；後期：それぞれ  $r = .29$  と  $r = .47$ )。また、後期のリスニングと前期の文法と読解の相関(それぞれ  $r = .34$  と  $r = .39$ )が、前期リスニングと文法と読解の相関(それぞれ  $r = .14$  と  $r = .28$ )より高くなっている。

このことは、文法や読解の習熟が相応にある受験者が、入学後においては、英語の音声面には、まだ不慣れであり、聞き取って理解するまでに至らなかったため、文法や読解力の差がリスニング得点の差として表れなかったが、他の英語科目の履修も含めた1年間の英語カリキュラムを通じて、英語の音声に慣れることによって、文法や読解力がリスニング得点に反映されるようになったということを示唆している可能性がある。逆に言えば、リスニングが伸びていくためには、文法や読解の習熟が不可欠であり、それを基盤として音声面に慣れる必要があることを示唆している可能性がある。この点については、「5．G-TELP リスニングの伸長」で、再び考察する。

### 3.3．読解の相関関係

前期の読解に関しては、文法との相関が比較的高く、リスニングとはやや低めである(それぞれ  $r = .49$  と  $r = .28$ )。それに対して、後期に関しては、読解と文法およびリスニングの相関が同程度に高くなっている(それぞれ  $r = .44$  と  $r = .47$ )。これは、先に述べたように、音声に習熟することで、読解(および、文法)力がリスニングに反映されるようになったためではないかと推測できる。

前後期の読解の相関は  $r = .53$  であり、中程度の相関が見られた。同学期の総点との相関は、かなり高く、3セクションの中で最も高くなっている( $r = .83$ )。後期の総点と前期の読解との相関は、中程度であった( $r = .59$ )。

## 4 . G-TELP 文法の伸長

以下の節では、G-TELP のセクションごとの結果の分析を行う。まず、本節では、受験者の G-TELP 文法セクションの得点について、(1) 記述統計、(2) 総点の10%分位別分析、(3) 前期文法得点の10%分位別分析の順に分析結果を報告する。

### 4.1 . 記述統計量

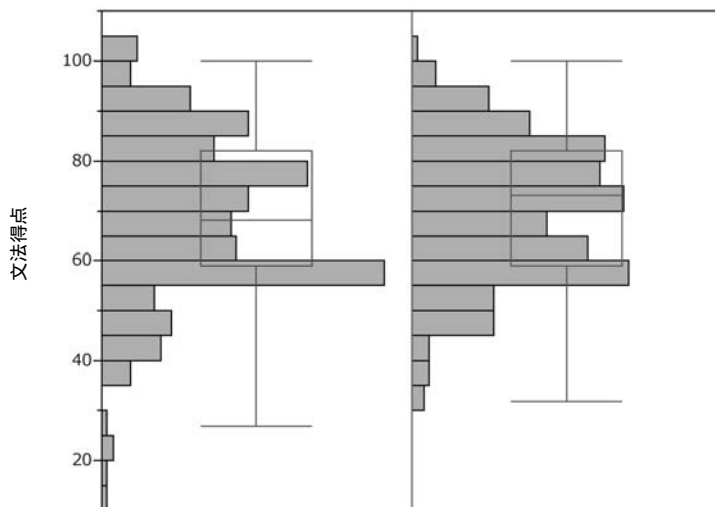
文法セクションの平均点は、前期68.40点 (SD = 16.6)、後期69.44点 (SD = 14.0) であった (その他の記述統計量については、表 6 を参照)。また、図 4 には、前後期ごとの文法得点のヒストグラム・箱ひげ図が示されている。

表 6 G-TELP文法の記述統計量

	N	平均	標準偏差	最大値	中央値	最小値
前期	264	68.40	16.6	100	68	14
後期	265	69.44	14.0	100	73	32

文法は、G-TELPの3セクションの中で、最も平均点が高く、最大値は満点である。後期において、最小値は上昇しており、受講者の底上げがなされていると言える。また、中央値も上昇が見られる (表 6 参照)。しかし、前期と後期の得点の差の平均は、わずか1.04点であった。この差の平均を対応のある t 検定で検証したところ、統計的に有意ではなかった ( $p > .05$ ;  $t = 1.12$ )。また、前期と後期の文法得点の相関は  $r = .52$  ( $p < .05$ ) であった。したがって、前期と後期の文法得点に相関はあるものの、受験者全体としては、文法に関しては、得点には伸びは認められなかった。

図4 前期(左)・後期(右)の文法得点のヒストグラム・箱ひげ図



#### 4.1. 総点の10%分位別分析

受験者全体では、文法の得点に伸びが見られなかったものの、得点層別による文法得点の伸びを検証するため、前期総点に基づいた分位別グループによって、文法得点の伸びの検証を行った。なお、前期文法得点と前期総点の相関は  $r = .80$  であり、かなり高い相関がある。

##### 4.1.1. 前期の文法得点

表7は、総点の分位グループ別の文法得点の伸びをまとめた表である。また、図5は、ヒストグラム・箱ひげ図でこれらを表したものである。文法の平均得点を総点の分位グループごとに見ていくと、グループ3～5、グループ7と8には、それぞれ大きな差がない。一方、グループ9と10のあいだには大きな隔たりがある。ただし、総点の分位グループによる前期文法の平均得点は、グループ順位が上がるほど高くなっており、順位に逆転は起きてい

ない(図5の各グループの左側の箱ひげ図が概ね右肩下がりになっている)。グループ内の散らばりに関しては、表7と図5が示すように、標準偏差10前後の散らばりがある。

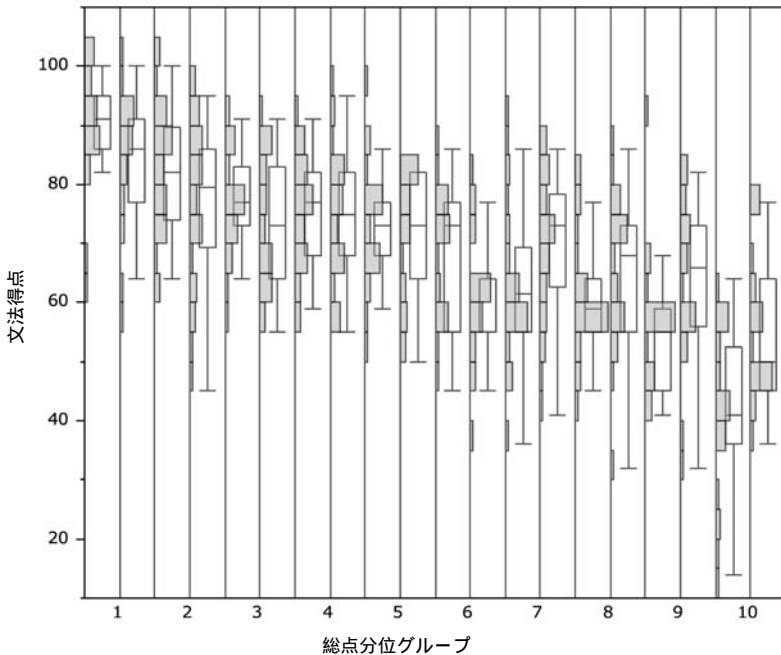
表7 総点分位グループごとの G-TELP 文法得点の伸び

総点分位 グループ	前期 文法	後期 文法	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 22)	88.73 (9.3)	83.45 (10.4)	-5.27* (11.3)	27	-5	-27	.35
2 (n = 32)	82.06 (9.3)	76.97 (12.7)	-5.09 (15.27)	18	0	-46	.06
3 (n = 26)	76.69 (8.3)	73.77 (10.7)	-2.92 (10.7)	18	-4.5	-22	.33
4 (n = 30)	75.40 (8.4)	73.97 (10.7)	-1.43 (12.2)	27	-2	-27	.19
5 (n = 23)	73.00 (9.7)	71.43 (10.7)	-1.57 (11.2)	18	-4	-22	.40
6 (n = 23)	67.87 (11.1)	60.83 (11.4)	-7.04 (17.1)	28	-9	-41	-.16
7 (n = 30)	62.33 (12.9)	69.27 (12.3)	6.93* (14.5)	31	9	-23	.34
8 (n = 29)	60.31 (10.4)	64.97 (12.5)	4.65 (13.7)	31	5	-27	.29
9 (n = 24)	55.5 (11.1)	63.67 (13.6)	8.17* (16.5)	37	11.5	-27	.12
10 (n = 25)	41.28 (13.2)	54.56 (12.9)	13.28* (15.7)	41	9	-14	.28

( )は標準偏差

\*は  $p < .05$

図5 前期(左)・後期(右)の文法得点の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図

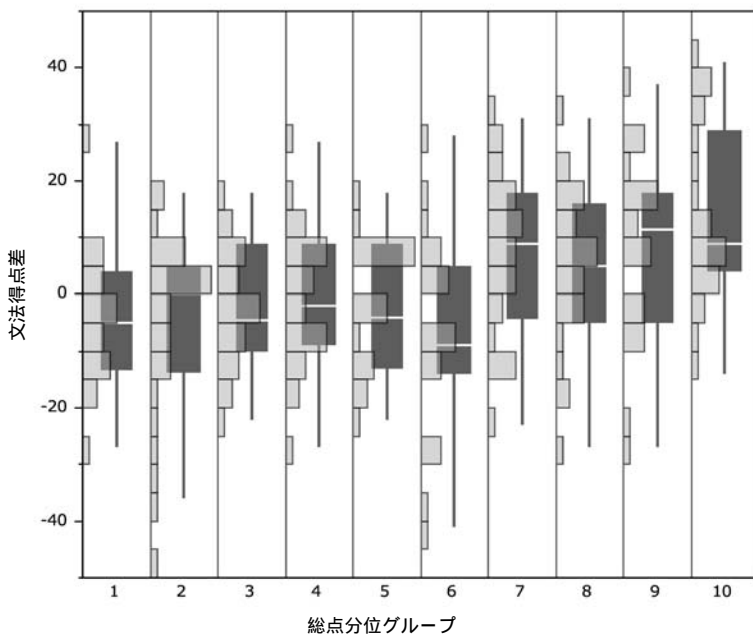


#### 4.1.2. 前後期の比較

後期の文法得点は、グループ内の散らばりが一様に拡大している。また、文法得点の伸びを表した図6が示すように、総点の場合と同様に、前期に得点の高い層ほど得点を大きく減少させ、逆に、得点の低い層ほど得点の上昇が大きいという傾向が見てとれる。また、グループ7(下位40%)を境として、得点上昇と下降が入れ替わっている。グループ1～6までは、平均すると得点を減らし、グループ7以降は、平均すると得点を上昇させている。そのため、グループ6の後期の文法得点は、グループ7、グループ8、グループ9のそれに抜かれている。これは、グループ6で、大きく点数を落とす受験生が数名いたためである。さらには、平均ではなく、中央値で見ると、後

期の得点では、グループ 6 を除き、グループ 3 からグループ 9 には大きな差がないことがわかる。

図 6 文法得点差の総点分位グループ別ヒストグラムと箱ひげ図



#### 4.2 . 文法得点の10%分位別分析

前期の文法得点を10%分位ごとにグループ化したのが、表 8 である(「文法分位グループ」)。そして、表 9 と図 7 は、その文法得点の分位ごとによる G-TELP 文法得点の伸びを表したものである。

##### 4.2.1 . 前期文法得点

文法分位グループごとの前期の文法得点の分布を見ると(図 7 参照)、最下位グループにやや大きな散らばりがあり、最上位の 2 つのグループと最下位から 2 番目のグループに小さな散らばりがある。それ以外は、グループ内

の散らばりはなく同得点である。グループ間の得点の差を見ると、グループ1とグループ2のあいだに9.5点ほど、グループ9とグループ10のあいだに12点ほどの大きな差があり、それ以外については4～5点ほどの差である。

表8 前期文法分位点と文法分位グループ

	上位 10%	20%	30%	40%	50% (中央値)	60%	70%	80%	90%	最小値
前期文法得点	88.5	82	77	73	68	64	59	55	45	14
文法分位グループ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

表9 文法分位グループごとの G-TELP 文法得点の伸び

文法分位 グループ	前期 文法	後期 文法	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 26)	93.85 (3.8)	81.19 (12.1)	-12.65* (11.6)	5	-9	-46	.27
2 (n = 44)	84.27 (2.0)	75.11 (11.7)	-9.16* (11.2)	9	-9	-36	.32
3 (n = 35)	77.00 (0)	72.83 (12.1)	-4.17* (12.1)	18	-4	-41	.00
4 (n = 25)	73.00 (0)	72.40 (11.5)	-0.6 (11.5)	18	4	-28	.00
5 (n = 22)	68.00 (0)	70.64 (11.5)	-2.32* (11.5)	27	2.5	-18	.00
6 (n = 23)	64.00 (0)	68.87 (11.1)	2.32* (11.1)	27	9	-14	.00
7 (n = 24)	59.00 (0)	61.00 (14.1)	2.87 (14.1)	23	5	-27	.00
8 (n = 24)	55.00 (0)	67.83 (11.9)	12.83* (11.9)	31	18	-10	.00
9 (n = 21)	47.14 (2.5)	59.43 (12.0)	12.29* (13.5)	37	14	-18	-.51
10 (n = 20)	34.75 (8.7)	53.95 (13.1)	19.2* (13.1)	41	18	4	.33

( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$



#### 4.2.2 . 前後期の比較

後期の文法得点は、各グループ12程度の標準偏差があり、グループ内での得点の散らばりが大きくなり、得点の伸びは個人差が大きくなっている。また、最上位グループと最下位グループの平均点の差が小さくなっている。つまり、このことは、先の傾向と同様に、上位層ほど得点を大きく落とし、下位層ほど得点を大きく伸ばしている傾向があることを示している。図8は、文法得点の伸びを文法分位グループ別にヒストグラム・箱ひげ図で表したものである。この図から、その傾向が、総点分位別の分析より、はっきり見てとれる。

図7 前期（左）・後期（右）の文法分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図

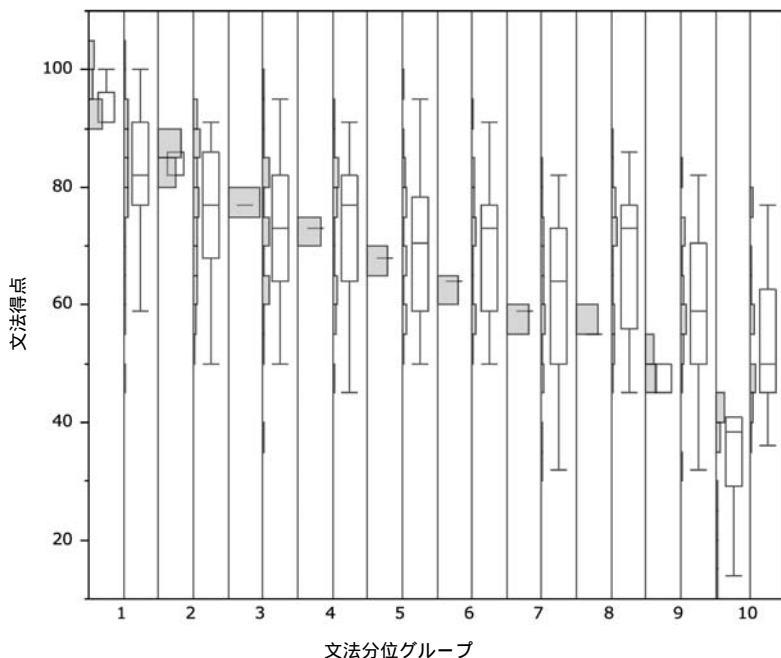
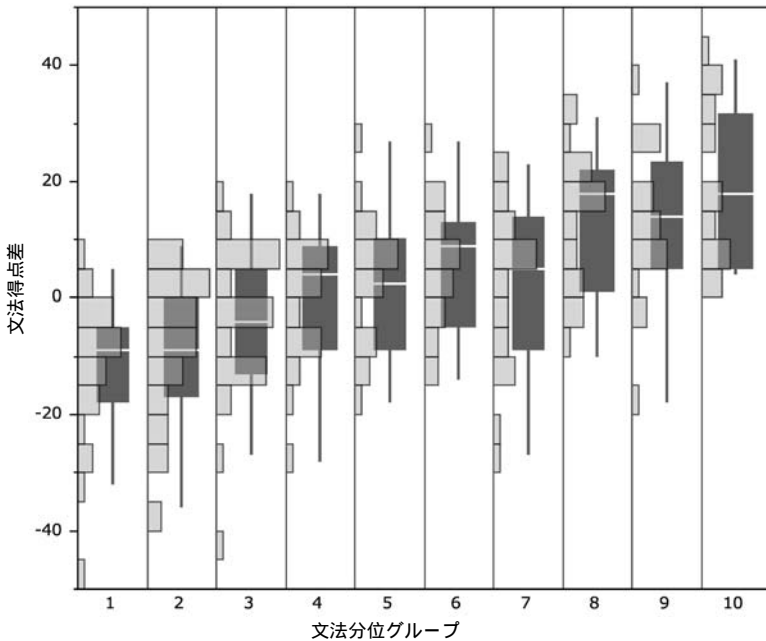


図8 文法得点差の文法分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



## 5. G-TELPリスニングの伸長

本節では、G-TELPリスニング・セクションの得点の伸びについて、(1) 記述統計、(2) 総点の10%分位別分析、(3) 前期リスニング得点の10%分位別分析の順に報告する。

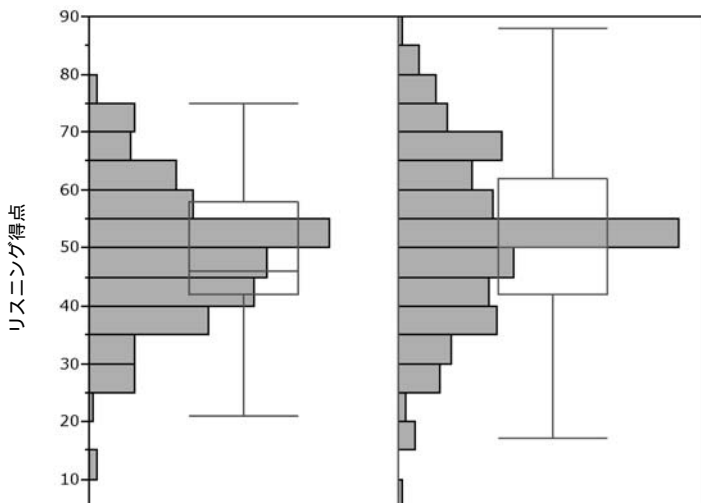
### 5.1. 記述統計量

表10はリスニングの前後期の記述統計を表している、また、図9はリスニングの前後期のヒストグラムおよび箱ひげ図である。リスニング・セクションは3セクションの中で最も平均得点が低く、また、受験者間の差が最も小さい。表10が示すように、前期の平均点は48.50点(SD=11.4)であり、後

表10 G-TELPリスニングの記述統計量

	N	平均	標準偏差	最大値	中央値	最小値
前期	264	48.50	11.4	75	46	12
後期	265	51.50	14.0	88	50	8

図9 前期（左）・後期（右）のリスニングのヒストグラム・箱ひげ図



期は51.50点 (SD = 14.0) であった。

平均, 中央値, 最大値も上昇しており, 対応のある t 検定の結果は, 統計的に有意に得点上昇が見られ, 受験生のリスニングにおける習熟度に伸びが認められた ( $p < .05$ ;  $t = 3.26$ ).

## 5.2. 総点の10%分位別分析

受験生の前期総点分位グループごとに前後期のリスニング得点を表したのが, 表11であり, ヒストグラム・箱ひげ図は図10である。なお, 前期総点と前期リスニングの相関関係は  $r = .56$  であり, それほど強い相関関係はない。

総点分位グループによる前期リスニングの平均点に、概ね、順位の入替わりがない。つまり、総点の高いグループほどリスニングにおいても得点が高い傾向がある。ただし、グループ2～4、グループ5～8、グループ9と10のそれぞれの平均得点には、さほど大きな違いがない。そのため、後期のリスニング得点では、グループ順位がかなり入れ替わっている。まず、総点分位グループ3が最も平均点が高くなっており、前期の得点と比べると、統

表11 総点分位グループごとの G-TELP リスニング得点の伸び

総点分位 グループ	前期 リスニング	後期 リスニング	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 22)	62.90 (6.4)	57.91 (11.8)	-5.00 (12.1)	21	-4	-37	.22
2 (n = 32)	54.25 (9.0)	57.00 (13.9)	2.75 (16.2)	33	4	-25	.04
3 (n = 26)	52.77 (10.0)	58.96 (10.7)	6.19* (12.1)	29	4.5	-21	.32
4 (n = 30)	51.40 (8.8)	53.67 (11.8)	2.27 (16.3)	37	2	-33	-.24
5 (n = 23)	46.70 (8.4)	58.57 (13.5)	11.87* (17.8)	50	12	-21	-.28
6 (n = 23)	47.70 (9.6)	51.57 (15.1)	3.87 (13.9)	33	4	-25	.44
7 (n = 30)	46.73 (10.6)	50.43 (11.5)	3.70 (13.1)	29	2	-25	.30
8 (n = 29)	43.48 (10.7)	46.66 (9.9)	3.17 (14.5)	25	4	-38	.01
9 (n = 24)	39.71 (10.5)	42.54 (14.5)	2.83 (14.5)	37	0	-25	.36
10 (n = 25)	39.32 (9.5)	37.64 (11.3)	-1.68 (16.2)	34	-4	-25	-.20

( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$

計的にも有意に得点を伸ばしている。同様に、総点分位グループ5が後期においては、2番目に平均点が高くなっている。図10が示すように、前期の中位グループが後期において、得点を大きく上げている。リスニングの得点は、中位レベルの学習者には、学習によって飛躍的に上昇する可能性を持っていることを示唆している。このことは、図11からも視覚的に見てとれる。また、総点の分位グループの前後期のリスニング得点の比較をすると、最上位グループと最下位グループを除いて、後期のリスニング得点は上昇している傾向があることから、概して、リスニングは学習効果が出やすいセクションであると言えるだろう。

図10 前期（左）・後期（右）のリスニング得点の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図

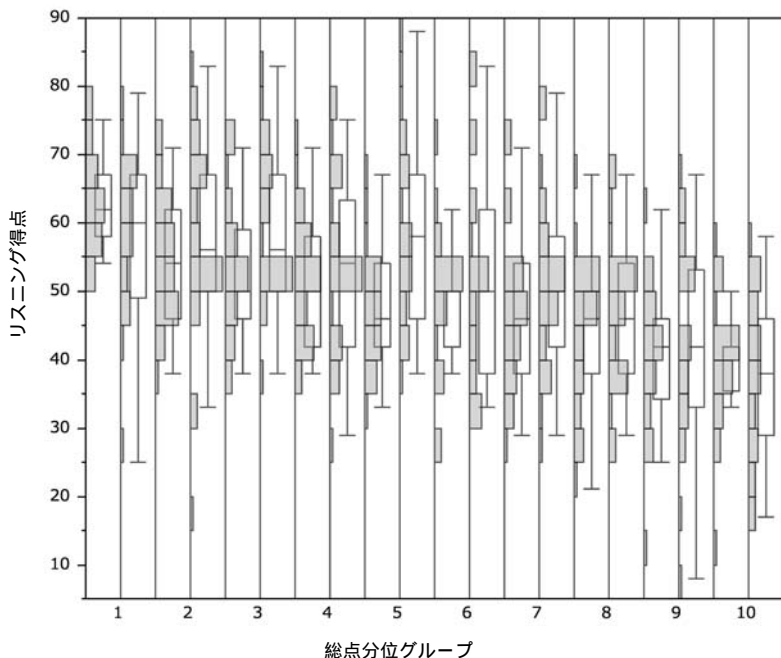
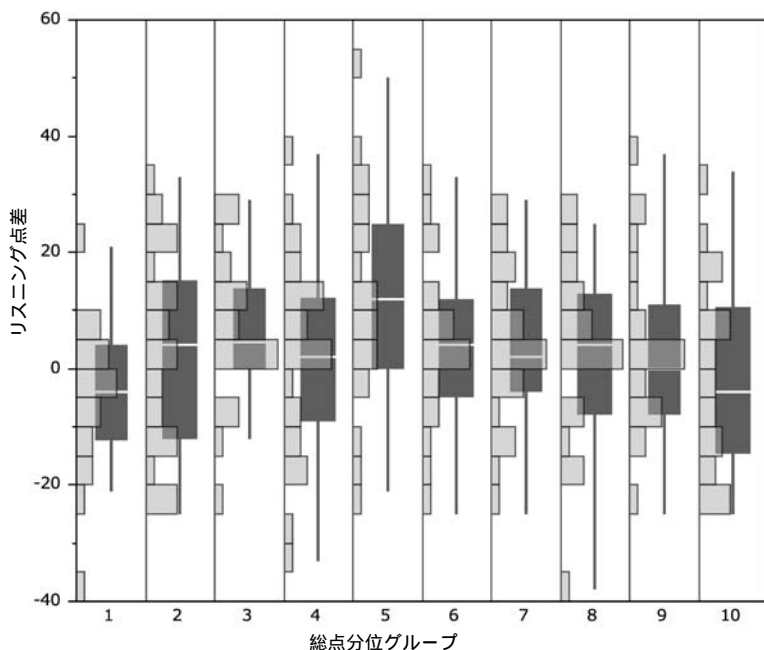


図11 リスニング得点差の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



### 5.3. リスニング得点による10%分位別分析

表12は前期のリスニング得点の10%分位別グループにした時の分位得点である。この分位点グループ（「リスニング分位グループ」）に基づいて、前後期のリスニング得点を比較したものが表13であり、ヒストグラム・箱ひげ図で表したものが図12である。さらに、前後期のリスニング得点差をヒストグラム・箱ひげ図で表したのが図13である。

前期リスニング分位グループは、最上位グループと最下位層グループ以外には、グループ内での得点に違いがなかった。また、先に述べたように、リスニングの得点は個人差が相対的に小さく、ほとんどの受験生の得点は40点から60点の範囲にある。

リスニング分位グループごとに、後期のリスニングの得点を見ると、下位

層が得点を上昇させている。とくに、下位30%層が得点を大きく伸ばしている。それに対し、上位層は得点を伸ばしていない。とくに、上位10%層は得

表12 前期リスニング分位点とリスニング分位グループ

	上位 10%	20%	30%	40%	50% (中央値)	60%	70%	80%	90%	最小値
前期リスニング得点	62	58	54	50	46	46	42	38	38	12
リスニング分位グループ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

表13 リスニング分位グループごとの G-TELP リスニング得点の伸び

リスニング分位 グループ	前期 リスニング	後期 リスニング	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 44)	65.98 (4.3)	57.16 (12.8)	-8.82* (12.9)	16	-8.5	-38	.15
2 (n = 25)	58.00 (0)	56.56 (14.4)	-1.44 (14.4)	25	-4	-25	.00
3 (n = 24)	54.00 (0)	51.83 (12.5)	-2.17 (12.5)	25	-4	-21	.00
4 (n = 34)	50.00 (0)	52.65 (12.3)	2.65 (12.3)	33	0	-25	.00
5 <sup>10</sup> (n = 43)	46.00 (0)	52.07 (12.5)	6.07* (12.5)	37	8	-25	.00
7 (n = 40)	42.00 (0)	46.53 (14.1)	4.53* (14.1)	33	4	-25	.00
8 (n = 29)	38.00 (0)	50.45 (16.6)	12.45* (16.6)	50	12	-21	.00
10 <sup>11</sup> (n = 25)	27.8 (6.2)	43.04 (12.8)	15.24* (11.2)	37	17	-4	.49

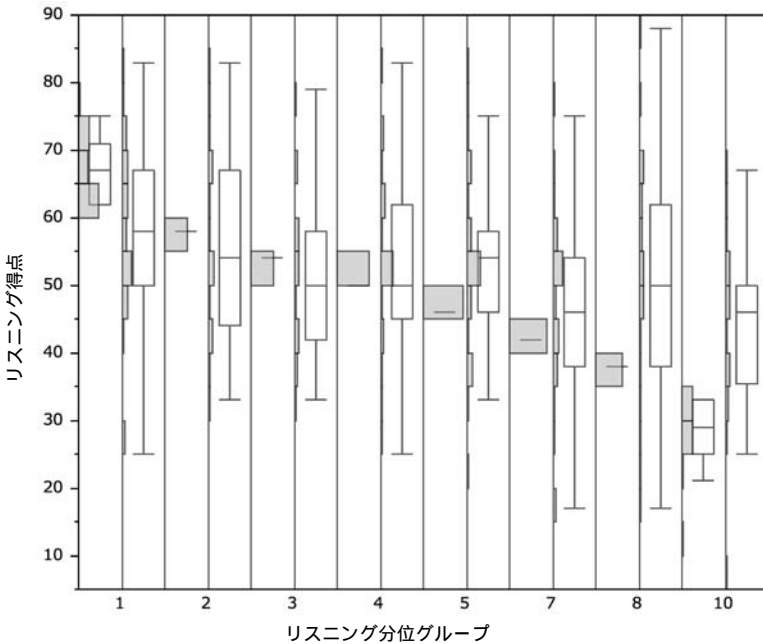
( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$

10 中央値と40%分位値が同値であるため、上位40%～60%が一グループとなっている。

11 80%分位値と90%分位値が同値のため、一グループとなっている。

図12 前期(左)・後期(右)のリスニング分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図

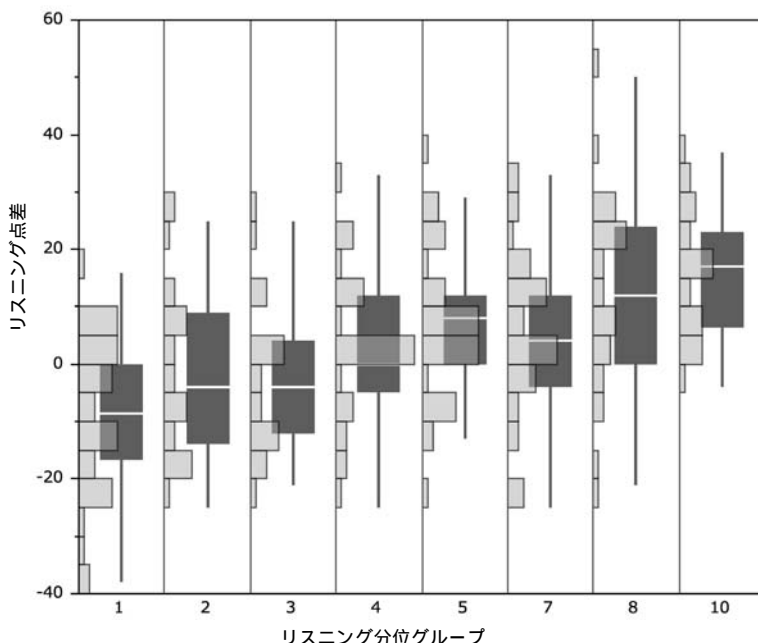


点を9点ほど低下させている。概ね、総点や文法の得点と同様に、上位層ほど得点を大きく落とし、下位層ほど得点を大きく伸ばしている傾向が見られる。また、前後期の得点変動がかなり大きいという特徴が見られる。さらには、前期に下位層であっても、後期には最上位層に位置する得点まで伸ばす受講生も見られる(図12参照)。したがって、先に述べたように、リスニングの得点は学習効果が最も得られやすいセクションであることが、この分析からも分かる。

ただし、このことは、先に相関関係の節で述べたように、後期のリスニング得点が、前期のリスニング得点よりも、前期や後期の文法・読解とより大きく相関するということを考慮すると、当初のリスニング得点に反映されていなかった文法や読解の習熟度が、大学英語教育でより音声面に慣れること



図13 リスニング得点差のリスニング分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



によって、後期には、その相関が可視化されてきたと考えることもできる。

## 6 . G-TELP 読解の伸び

本節では、G-TELP 読解セクションの得点について、(1) 記述統計、(2) 総点の10%分位別分析、(3) 前期読解得点の10%分位別分析の順に分析結果を報告する。

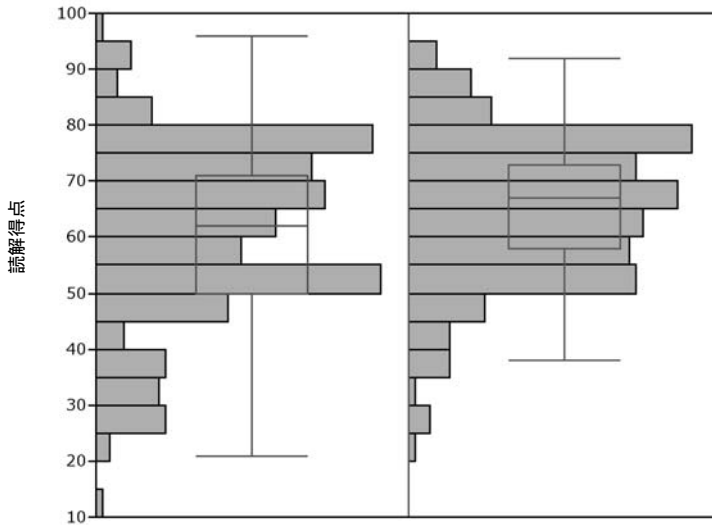
### 6.1 . 記述統計量

表14は、前後期ごとの読解セクションの記述統計量である。また、図14は、読解得点をヒストグラム・箱ひげ図で表している。前期の読解の平均点は

表14 G-TELP 読解の記述統計量

	N	平均	標準偏差	最大値	中央値	最小値
前期	264	60.62	15.6	96	62	12
後期	265	64.35	13.0	92	67	21

図14 前期（左）・後期（右）の読解のヒストグラム・箱ひげ図



60.62点 (SD = 15.6), 後期は64.35点 (SD = 13.0) であった。対応のある t 検定の結果は, 統計的に有意であり, 読解得点の伸びが認められた ( $p < .05$ ;  $t = 4.29$  )。

## 6.2. 総点の10%分位別分析

前期総点の分位グループごとの前後期読解得点, ならびに, それらをヒストグラム・箱ひげ図で表したのが, それぞれ, 表15と図15である。前期総点と前期読解には強い相関 ( $r = .83$ ) があり, 総点の分位グループによる前期

読解得点は上位グループ程，平均点が高くなっている。一方，後期読解得点においては，総点分位グループ 2 と 3 ， 6 と 7 に順位の入替わりが見られる。しかし，その差は僅かである。前期読解の得点の高い受験者ほど，後期読解得点も高い傾向がある ( $r = .53$ )。

表15 総点分位グループごとの G-TELP 読解の得点の伸び

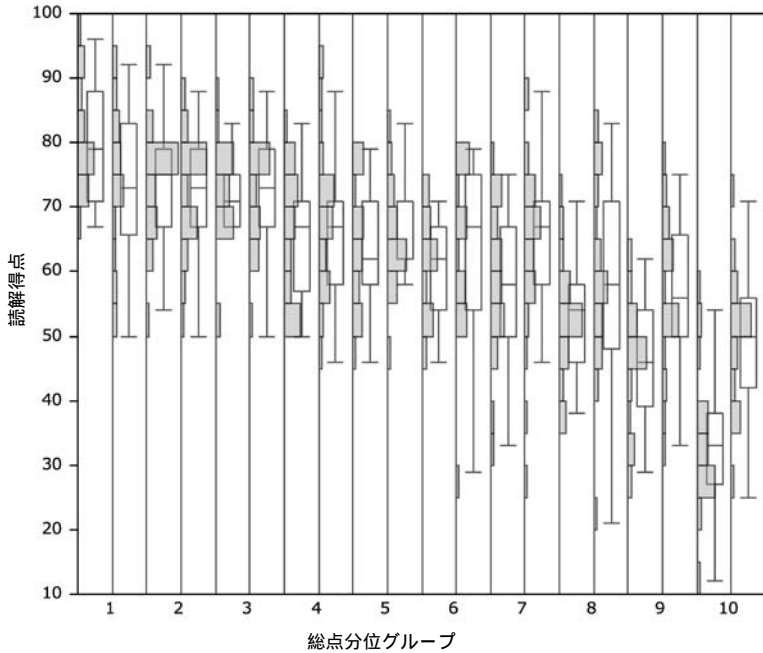
総点分位 グループ	前期 読解	後期 読解	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 22)	79.82 (8.5)	73.50 (12.0)	-6.32* (13.6)	16	-4	-30	.15
2 (n = 32)	74.06 (8.4)	71.88 (9.0)	-2.19 (10.0)	13	0	-33	.33
3 (n = 26)	71.27 (7.5)	72.42 (9.0)	1.15 (9.5)	21	0	-17	.35
4 (n = 30)	65.23 (9.2)	67.80 (11.2)	2.57 (13.8)	29	0	-17	.10
5 (n = 23)	63.70 (8.9)	64.70 (7.6)	1.00 (9.4)	25	0	-13	.36
6 (n = 23)	60.22 (7.7)	63.52 (11.7)	3.30 (14.4)	25	5	-42	-.07
7 (n = 30)	58.27 (10.5)	63.63 (12.8)	5.37 (18.1)	33	8	-46	-.20
8 (n = 29)	52.72 (8.8)	59.10 (14.1)	6.38* (14.3)	41	4	-21	.29
9 (n = 24)	45.96 (9.9)	56.21 (11.1)	10.25* (11.2)	38	8	-12	.44
10 (n = 25)	33.48 (10.5)	49.04 (9.8)	15.56* (12.8)	46	17	-8	.21

( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$

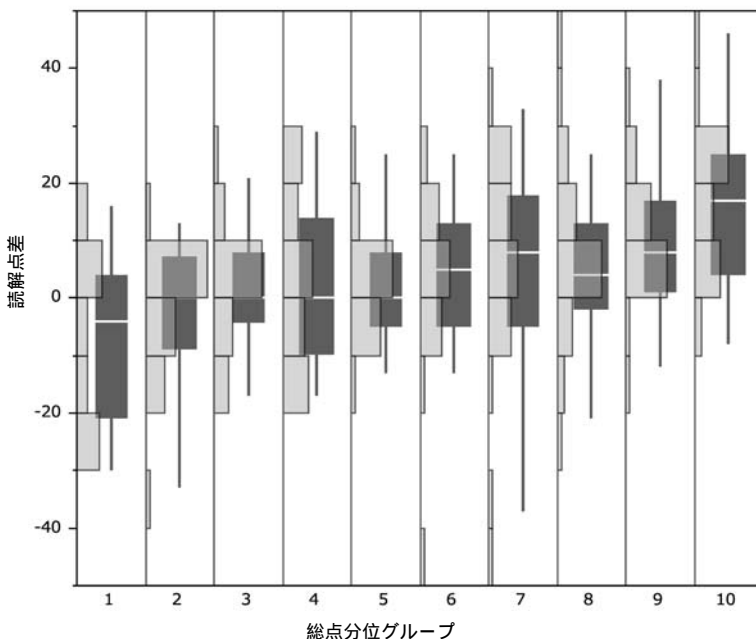
得点の伸びを見ると，下位の受験者ほど得点の伸びは大きく，逆に，上位

図15 前期(左)・後期(右)の読解得点の総点分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



の受験者ほど得点を落とすという傾向が読解においても見られた。図16の得点の伸びを表したヒストグラム・箱ひげ図からも、この傾向は明らかである。

図16 読解得点差の総点分位グループ別ヒストグラムと箱ひげ図



### 6.3 . 読解得点の10%分位別分析

前期の読解得点を10%分位ごとにグループ化(「読解分位グループ」)し、読解得点の伸びを検証した。それぞれの分位点は表16に示されている。

表16 前期読解分位点と読解分位グループ

	上位 10%	20%	30%	40%	50% (中央値)	60%	70%	80%	90%	最小値
前期読解得点	79	75	71	67	62	58	54	46	38	12
読解分位グループ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

表17および図18は、読解分位グループによる読解得点の伸びを示した表およびヒストグラム・箱ひげ図である。前期の読解得点に関しては、標準偏差

や箱ひげ図から明らかなように，最上位グループと最下位グループに得点のばらつきがあり，グループ8と9にも若干のばらつきがある以外は，グループ内に得点のばらつきはない。

表17 読解分位グループごとの G-TELP 読解得点の伸び

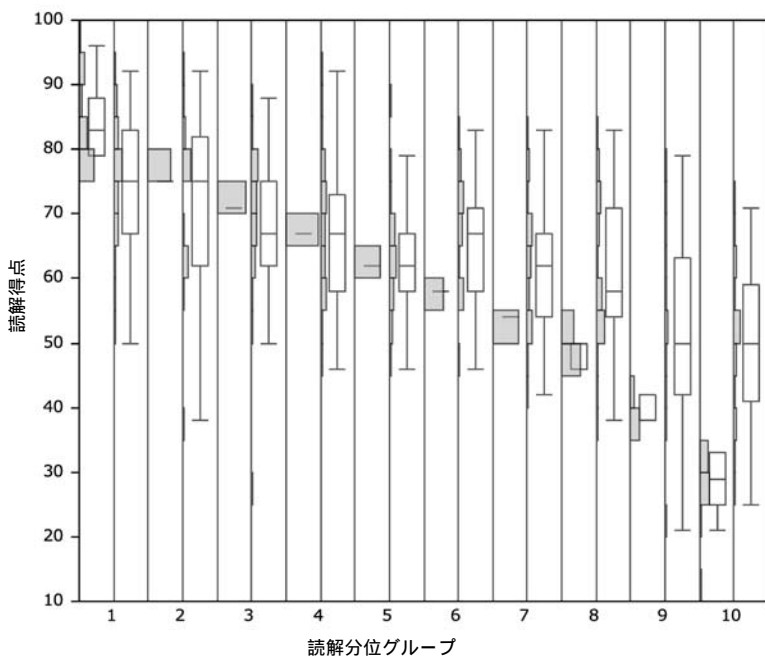
読解分位 グループ	前期 読解	後期 読解	差の平均	得点差			相関
				最大値	中央値	最小値	
1 (n = 32)	83.27 (5.3)	74.15 (10.6)	-9.12* (10.8)	9	-9	-33	.22
2 (n = 24)	75.00 (0)	71.96 (12.4)	-3.04 (12.4)	17	0	-37	.00
3 (n = 31)	71.00 (0)	66.52 (13.5)	-4.48 (13.5)	17	-4	-46	.00
4 (n = 33)	67.00 (0)	67.00 (10.2)	0.00 (10.2)	25	0	-21	.00
5 (n = 26)	62.00 (0)	64.50 (9.8)	2.50 (9.8)	26	0	-16	.00
6 (n = 21)	58.00 (0)	66.24 (8.4)	8.24* (8.4)	25	9	-12	.00
7 (n = 28)	54.00 (0)	61.57 (10.5)	7.57* (10.5)	29	8	-12	.00
8 (n = 32)	47.63 (2.0)	60.25 (11.0)	12.63* (10.4)	37	12	-8	.35
9 (n = 14)	39.14 (1.9)	51.86 (14.9)	12.71* (14.9)	41	10	-17	.05
10 (n = 22)	28.59 (5.4)	49.45 (11.3)	20.86* (11.0)	46	21	0	.29

( ) は標準偏差

\*は  $p < .05$ 水準で有意

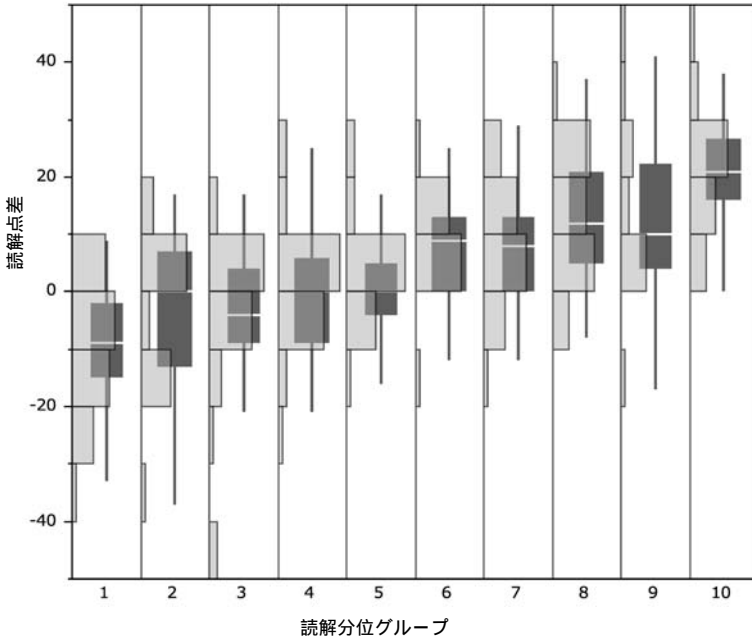
これまでの他のセクションの分析と同様，読解分位グループ別に得点の伸びを見ると，上位層ほど得点の低下が大きくなり，逆に，下位層になるほど

図17 前期（左）・後期（右）の読解分位グループ別ヒストグラム・箱ひげ図



得点の上昇が大きくなる傾向が顕著である。下位半分はかなり得点を伸ばしている一方、上位30%層以上は得点を低下させ、上位層ほど、その低下が増大している。

図18 読解得点差の読解分位グループ別ヒストグラムと箱ひげ図



## 7. まとめと考察

本稿では、2011年度入学生が、前期および後期に、それぞれ受験したG-TELP（レベル3）の結果を報告し、前期の得点グループ別分析を通じて、どのような傾向が見られるかを検証した。

本調査で明らかになった重要な点は、次の2点である。第1に、概ね後期の得点が前期を上回っているものの、後期における得点の上昇はわずかであることである。第2に、総点および文法・リスニング・読解の各セクションを通じて、概ね、下位層ほど得点の伸びが大きく、逆に、上位層ほど得点が伸びていないばかりか、むしろ、得点を大きく低下させる傾向が見られたことである。総点の平均点の伸びは、主として、得点下位者が得点を大きく伸



ばしたことによるものであり、この伸びが僅かなものにとどまったのは、得点上位者が得点を大きく落とし、伸びの効果をほぼ相殺したためである。

こうした結果は、「総合英語」の授業が得点の下位者に、より効果的であり、得点上位者にはあまり効果的でないことを傍証している可能性がある。下位者は、前期の G-TELP 得点を受け、より危機感を持ち、より真剣に受講したことによるものかもしれない。また、「総合英語」は習熟度別クラス編成ではなかったため、授業自体が下位者にとっては、相対的に難易度が高く感じられたため、相応の努力をしたとも考えることができる。

逆に、上位者は前期の得点を受けて、後期の「総合英語」にまじめに取り組まなかった可能性も考えられる。また、習熟度編成でないため、授業自体が彼（女）らには、相対的に平易となり、英語習熟度を伸長させる効果や学習への動機づけ等のプラスの効果を持たなかった可能性もある。さらには、プラスの効果を持たなかったばかりか、得点を大きく低下させていることを考えれば、マイナスの効果を持った可能性さえある。たとえば、授業が相対的に平易に感じられるため、学習意欲が失われたり、また、「総合英語」の評価の20%を占める G-TELP の得点以外の80%で、容易に点数を稼ぐ（あるいは、稼げる）ために、評定を気にしなければ、G-TELP そのものを真剣に受験しなかった可能性がある。

これは、単なる推測であり、なぜ成績下位層が得点を伸ばすことができたのか（伸びしろがより大きいという側面は除くとしても）、逆に、なぜ成績上位層が得点を落とす傾向があるかについては、より詳細な調査が必要である。こうした点は、たとえば、学生への聞き取り調査や G-TELP の得点と最終評価の関係などを調査することで、明らかにできるとと思われる。

以上のような本調査の結果から示唆されることは、得点下位者にとってより効果的なカリキュラムや教育方法や内容について改善を重ねることはもちろんのこと、得点上位者が得点をさらに伸ばすようなプログラムを検討する必要がある。逆に言えば、得点上位者をさらに伸ばすことが可能なプログラ

ムにつなげることができれば、さらに良い結果を得られる余地があるということ。今回の調査は明らかにしたとも言える。

このようなプログラムの方策はいろいろあるであろうが、そのひとつには、早い段階から習熟度別にクラスを編成し、その習熟度に応じた目標をそれぞれ立てることが挙げられるだろう。セクションごとの多少の違いはあるものの、受験者間の習熟度のばらつきは小さくない。したがって、習熟度別編成によって、それぞれの学習者が手応えを感じる程度の難易度の内容を扱う事が考えられる。得点上位者が、得点を単に維持するだけでなく、少しでも上昇させることができれば、学生全体の英語習熟度を高める結果につながる。そのため、得点上位者の向上につながるプログラムや方途を検討することが、次の重要な課題となる。

#### 謝 辞

本研究は、長崎大学経済学部100周年寄附金による研究支援費（課題名：「英語力の実態把握と学習支援のための調査研究」）の成果の一部である。研究助成に感謝申し上げます。

#### 引 用 文 献

- 小笠原真司・西原俊明（2011）『報告書 G-TELPによる長崎大学学生の英語学力分析：平成22年度総合英語 のデータを中心に』長崎大学大学機能開発センター。
- 丸山真純（2011）「長崎大学経済学部生の英語習熟度（1） 二つの英語試験と TOEIC 得点の観点から 」『経営と経済』, 91（1-2）, 93-113。
- 丸山真純（forthcoming）「G-TELP と TOEIC の換算式」『経営と経済』。